「ダビデの町」の発掘について

山　崎　保　興

Ⅰ．発掘前史

●第一段階（1838～1924）

エルサレムにおける最初の広域調査は1838年，Edward Robinson によって行なわれた。今日，神殿山囲壁西南隅に近い「西の壁」の一角に残る「ロビンソンのアーチ」はその業績を記念するものである。ついで1865年 Charles Wilson によって始めての試掘調査が行われた。同じく「西の壁」北隅，一般に「嘆きの壁」として知られている場所の北側に「ウィルソンのアーチ」と呼ばれるものがあり，その名を伝えている。かつては行き止りであったこのアーチ下の通路も，最近南北に貫通し，ダマスコ門から「嘆きの壁」広場へのコースが若干短縮されている。

1867年，Charles Warren は，「ダビデの町」と呼ばれる東の丘東側斜面地下に一つの竪坑を発見した。今日「ウォレンのシャフト」と呼ばれるものである。これは「ギホンの泉」につながる給水路であるが，またこれとの関連において，同じく「ギホンの泉」から丘の南端「シロアムの池」に通ずる地下水路も発見された。今日「ヒゼキアのトンネル」と呼ばれているものである。

1894～97年，F. J. Bliss と A. C. Dickie は，「シロアムの池」の近く，テュロペオンの谷の開口部に，大規模な防壁遺構を発見した。　1913年～14年，1923～24年の二次にわたって，R. Weil は「ダビデの町」発掘調査を行い，その南端部に東西防壁線の集合点を発見した。

●第二段階（間大戦期）

第一次大戦後，長年にわたりオットマン・トルコの支配下にあったパレスチナが，イギリスの委任統治下に入ることにより，世界中の考古学者たちが，続々とこの地に向い，次々と各国の現地研究所が開設されて

ゆくが，有名なものに W. F. Albright を長とする American Schools of Oriental Reserch があり，1923年創設，以後エルサレム旧市内における調査活動の中心となった。British Palestine Exploration Fund は，早くから（1867年創設）Wilson や Warren の作業を支えて来たが，戦後面目を一新し，主としてオペル地域での作業に力を尽した。ここで忘れてはならないのはヘブライ大学の創設である(1925)。スコプス山上，オリーブ山との境い目に近いあたり，はるかにユダの沙漠を超えて死海の水面とモアブの山々を眺望するその一画に，今も考古学研究所を含むヘブライ大学第二キャンパスがそこにあるが，ここからE. L. Sukenikを始めとする多くの指導者があらわれた。今日世界的に著名なイスラエル考古学者 Yigael Yadin は Sukenik の息，直接その膝下にあって薫陶を受けた生粋のイスラエル考古学者である。今日ではかの地における発掘作業は完全にイスラエル考古学者の主導下にある。

1923～24年，R. A. S. Macalister と T. G. Duncan が，また1927～28年，J. W. Crowfoot と G. M. Fitzgerald が，集中的に「ダビデの町」発掘調査に着手，次々と新らしい発見と，それにもとづく見解を発表し，「ダビデの町」をめぐる論議はにわかに世界中の考古学者の関心をそこに集中した。

●第三段階（第二次大戦後）

第二次大戦が終り，イギリス委任統治時代が終りを告げ，イスラエルの独立宣言と共に現地はアラブ・イスラエル間の闘争のるつぼと化し，考古学的発掘調査もしばし中断状態となったのも余儀ないことであったろう。その後現地の情勢が少しづつ安定してゆくにつれて，発掘作業も再び活発化してゆくが，エルサレムに関する限りは，肝心の東エルサレムがヨルダン領であるため，イスラエル考古学者たちはただ手をこまねいて見ているほかはなかったのであるが，彼等にとって最も垂涎の思いを抱かざるをえなかったのは，1961年に開始された Kathleen Kenyon による「ダビデの町」発掘調査とその成果であったにちがいない。Kenyon の作業は1967年六日戦争直前まで続けられるのであるが，その業績はまことに画期的なものであった。とりわけその cut A は「ギホンの泉」直上斜面に短冊型に切り込み，「ミロ」と同定される段丘地の囲壁を出土せしめ，「ダビデの町」の範囲を定め，そのイメージを一変した。

●第四段階（六日戦争後）

いわゆる「六日戦争」直後，イスラエル考古学者たちはいっせいに東エルサレムに入り，問題の地点を実際に発掘調査する機会をようやく得ることになった。特筆すべきは，Benjamin Mazar 指揮下の神殿山周辺発掘調査計画であるが，1968年2月 Meir Ben-dovを現場の総監督として1978年まで長期にわたって行なわれた。その成果は B. Mazar: The Mountain of the Lood,（1975）に集大成されている。

II．「ダビデの町」発掘の状況

さて，上記「オペル」地域の発掘調査を完了したヘブライ大学考古学研究所並びにイスラエル発掘協会は，息もつかせずいよいよ「ダビデの町」発掘調査計画にとりかかることとなり，前回の老碩学マザール教授に代り，今回はヤディン教授の愛弟子 Yigal Shiloh を発掘隊長として1978年から作業開始，目下続行中である。未だその成果は定かではなく，論文のかたちにまとめるにはいささか材料不足ではあるが，若干の見聞にもとづいて，過去の経緯をふりかえりつつ，最新の「ダビデの町」発掘状況について，その一端をここに報告しておきたいと思う。

これまでのところシロ教授の「ダビデの町」発掘の新機軸は，ケニヨン女史によって一度は出土せしめられた（Kenyon's cut A）東の丘陵線上の域壁足下の再発掘による階段建造物の出土と，それに隣接する傾斜堡塁の発見である。以下このG（ギンメル）地区に焦点をしぼって見てゆきたい。

「ダビデの町」の階段状建造物を最初に発見したのはアイルランドの考古学者 R. A. S. Macalister であった。彼は1923年から25年にかけてこの地域の発掘調査を行なったが，その時丘の東側斜面頂上陵線部に重量感のある一つの塔と，それに連なる城壁の一部を発見した。彼はその城壁を，ダビデのエルサレム攻略以前，即ちエブス人がこの「シオンの要塞」を占有していた時代のものと認定し，この域壁線を前イスラエル時代のエルサレムの防衛線であろうと考えた。塔については，それをダビデ時代に建造されたものと推定，爾来この塔は「ダビデの塔」として知られて来た。そしてこれにつながる階段状建造物を，エブス人の堡塁と

考えた。このMacalisterの考えは，その後，1960年代に至るまで一般に受け入れられて来たのであるが，やがてイギリスの女流考古学者Kathleen kenyonによってくつがえされることとなる。

ケニヨン女史は，前述の如く1961年から67年にかけてエルサレムの本格的広域発掘調査を行なったが，その際この「ダビデの町」の丘陵東側斜面の下部，ケデロンの谷にほど近いあたりに別の城壁線を発見した。それは前記Macalisterの発見になる塔及び階段状建造物の直下100フィートの地点においてであった。彼女はこれを紀元前18世紀にまでさかのぼるものと認定，更にこの堡塁が紀元前8世紀まで使用されたことを論証し，Macalisterの発見した城壁線は，エブス人時代のそれよりもずっと狭い地域を囲んでいることを指摘して，結局Macalisterの発見した塔は，紀元前6世紀，エズラ・ネヘミヤの時代のものと推定，更に塔に連なる城壁部分については，これをハスモン王朝時代のものとした。このケニヨン女史の考えは，別の面からも証拠づけられる。即ち「ウオレンのシャフト」との関係である。この，いわゆる「ウオレンのシャフト」については既に述べたところであるが，この竪坑の開口部は，Macalisterの発見した城壁線よりもずっと斜面の下の方に位置している。この竪坑，すなわち給水坑が，万一の場合の籠城のために，イスラエル王朝時代から利用されたものであることは明らかであるとされているが，もしMacalisterの言うように，エブス人時代ないしダビデ時代の防壁線が，丘の頂上陵線沿いにあったとすれば，この「ウォレンのシャフト」は，『ダビデの町」の外側にあったということになる。これでは外敵に囲まれたとき，全く役に立たず，逆に敵に利することになって理に合わない。エルサレムの防壁線は，この給水坑を内部に含むかたちで，その外側にあったと考える方が理にかなっており，この点からしてもケニヨン女史の発見にかかる防壁線の方が，より妥当性を有することは明らかである。本来の防壁線は，むしろ「ギホンの泉」をもとり込むかたちで，ずっと斜面の下方に位置づけられるべきであり，ケニヨン女史の発見にかかる古い域壁こそ，元来のエルサレム防衛のための囲壁であったと考えられるのである。

Macalisterの発見にかかる城壁線が，どうしても紀元前586年のエルサレム陥落（バビロニア皇太子ネブカドネザールによる）の後に見定められねばならないこと，いわゆる「第二神殿時代」のものであることは，

別の点からも論証された。すなわち，ケニヨンはさらに，Macalister の称する「ダビデの塔」の下部土中に，階段状の建造物遺構を発見したのである。それは明らかに紀元前8世紀ないし7世紀のものと判定されたが，当然のことながらそれはバビロニアによるエルサレムの陥落に際して徹底的に破壊されたはずである。ただケニヨンは，この階段状建造物を，城壁補強のために土中に埋蔵された下部構造であろうと推定し，それ以上の疑念は感じなかったもののようであった。

やがて，いわゆる「六日戦争」の勃発と共に Kenyon の発掘作業は終始符を打たれ，その後の年月の経過と共に，その画期的な発掘調査の痕跡は，しだいにその輪廓をぼやけさせ，周囲はいつの間にかアラブ人の住居が建てこみ，かつての発掘現場の一部はゴミ捨て場にさえなっていた。われわれはただ当時の輝かしい成果の実態を，彼女の著書に添付された写真によって知るのみであった。

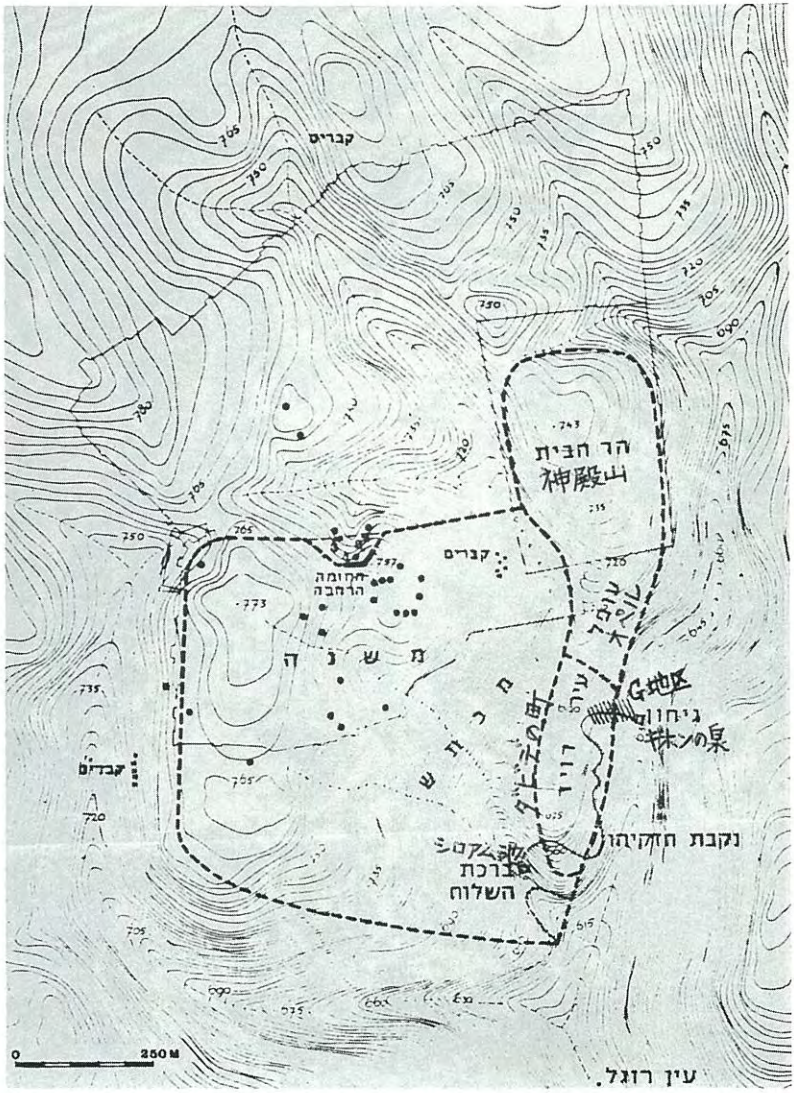
1978年夏，この同じ地区を，今度は直接現地のイスラエル考古学者が再発掘することになった。前述の如くヘブライ大学考古学研究所は，イスラエル考古局と，イスラエル発掘協会の支援と協力のもとに，同研究所の Yigal Shiloh 教授を発掘隊長としてこの作業に当らせることになった。筆者はたまたまその最初のシーズンが始まったばかりの頃にエルサレム再訪の機会を得，親しくそこでの作業状況を見学することが出来たが，当時はまだその成果も定かでなく，シロ教授自身も，「予想は五分五分，しかし希望はもっている」といったひかえめな態度であった。それからすでに三シーズンの作業を経過し，今年は四度目のシーズンを迎えたわけだが，ここで思わぬ支障を生じて作業は難行することになるのであるがその消息については，ここでは省略したい。しかしながら，その成果は予想以上に多くの話題をわれわれに提供してくれるもののようである。もうそろそろ何らかのかたちで正規の報告書が出てもよい頃，と推測して，先頃三度目のエルサレム訪問を敢てし，ヘブライ大学考古学研究所を訪れ，事務局長 Joseph Aviram 氏と共に，シロ教授にも会うことが出来たが，正式の報告書はまだ出す段階ではないとのことであった。あまりにも多く不明の部分を残しているためと思われるが，それでもこれまでの段階でも少なからず在来のわれわれの知識を上廻る画期的な発見がなされているもようであるので，以下簡単に知り得たことを記して

おきたい。

その最初のシーズンにおいて，彼は早くも思いがけないものを発見した。当初彼は，かつてケニヨン女史が丘の頂上陵線部の城壁下部から掘り出した「ダビデの町」の居住区を，改めて本格的徹底的に広範囲に出土せしめようと試みた。ところが彼はそこに，巨大な，急傾斜の，表面のなめらかな（土を打ち固めた）堡塁を見出したのである。それは厚さは15フィートないし20フィートにも及び，さらにはるかに50フィートも下にその根方が延びていると推定される巨大な傾斜堡塁であった。これは明らかに敵が町の中に攻め入ろうとしても，足がすべって堡塁をよじのぼることが出来ないように考慮されたものと思われるが，しかもその傾斜堡塁の核となっているのは，やはりケニヨンが出土せしめたものと同じ階段建造物であり，しかもそれが五層にも及んでいる。これはいったい何だろうか，というのが今なおシロ教授の疑問であるのだが，現在の彼の推定では，この傾斜堡塁もまた紀元前２世紀の終りから１世紀の始めにかけてのつまりハスモン王朝時代のものであり，さらにそれを掘ってゆけば，必ず再び階段建造物に行き当るにちがいない。そして少くとも，かつてケニヨンが掘り出し，今回改めてそこを掘り直しつつある城壁下部の階段建造物は，そこに残る二本の円柱の示すように，それは宮殿のポーチを示すものであり，あるいは，それはダビデもしくはソロモンの宮殿の跡かもしれないのである。（かつて筆者自身も参加した「オペル」の発掘，その「神殿山周辺発掘調査計画」第23区においても，四本の円柱をもつポーチが歴然とあらわれ，その辺いったいはヘロデ第二宮殿跡と推定されていた。）ともあれすべては未だ謎につつまれたままであり，今後の作業進展状況を見守るほかはない。

かくして，かつてわれわれの最大の関心事は，ケニヨン女史の発掘調査の一大成果として明らかになった東側斜面の段丘状堡塁「ミロ」のことであったが，今やシロ教授によるこの「ダビデの町」発掘調査路線は，また改ためて新らしい興味と関心へとわれわれをひきつけてやまないのである。

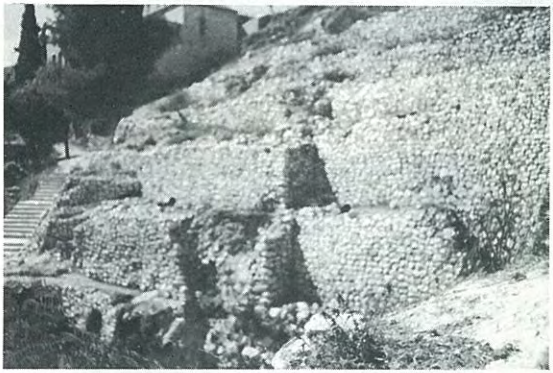
（地図・写真掲載）


קברים
הר חבית
神殿山
קברים
חומה
הרחבה
משנה
G地区
גיחון
キドロンの泉
נקבת חזקיהו
ירושלים
ברכת
השלוח
עין רוגל
0
250M

「ダビデの町」G地区の全景（筆者撮影以下同じ）

G地区頂上部分

右方「オペル地区」左方「G地区」



G地区中腹

G地区下部（ダビデ時代の城壁）

（参考文献）

イガール・シロ「ダビデの町における考古学的調査研究の過去と現在」（ヘブライ語）
（ヨセフ・アヴィラム編著『イスラエル考古学30年』所収）

Expboration of the 'Dauid Cify'

Yasuoki YAMASAKI

I. Historical Background
II. Excavaion of the'Area G'

Exploration of the 'David City'

Yasuoki YAMASAKI

I. Historical Background
II. Excavation of the 'Area G'